

II. 学びの森の風景

学びの森の住人たち (10)

—学校でもない学習塾でもない、
〈学びの森〉という世界が投げかけるもの—



アウラ学びの森 北村真也

9-1. キャリアの中の物語

不登校の子どもたちが、アウラの森を巣立った後、果たしてどういった人生を辿っていくのか？ その過程で彼らのキャリアはどう形成されていくのか？ ここでは、そのことに触れてみたいと思います。

中学で不登校になった子どもたちが、その後、高校でも不登校になっていくというケースは珍しくありません。精神科医の斉藤環さんも言うておられますが、社会的ひきこもりにある方の多くが、不登校経験者であることもよく知られた事実なのです。つまり、「不登校は繰り返される」のです。

不登校という事実を一つの社会現象としてとらえると、不登校という事実に表現されていく「何か」があることが見えてきます。それは、子どもの発達の問題やパーソナリティの問題、あるいは精神の問題という個人に還元されるものだけではありません。家族の問題や学校の問題、地域の問題といった現代社会が抱える問題までもが、そこに表現されているように思います。し

かもそれは、あまり単純な構造にはなっておらず、それらの複数が階層的に関連し合った構造になっているのです。だから私たちは、それらにいくつものフレームを設定することで、一つ一つを紐解くように整理し、そこに表現されている意味を読み解き、それを違った形の表現へと転換させているのかもしれない。

だから不登校という現象を、出席の問題、あるいは学習の問題に限定してとらえてしまうことは、問題の本質を見落とすことにつながるように思います。彼らを別室に登校させ、最低限の進路保証に相当する学習評価を与え、高校へと送り込んだとしても、そこに表現された問題の本質が解決されない限り、不登校は繰り返されるのです。私たちは、そんなケースをいやというほど見てきたのです。

アウラの森では、子どもたちは自分自身に向き合います。学びという活動を通して自分自身に向き合うのです。それは学びと

いう活動そのものが、本来、自分自身に向き合うことを要求するからであり、そのベクトルを持っているからです。本質的な学びの過程は、未知のモノに向き合いながら、それを自己の既存概念と統合していく過程であり、そこには自ずと「自己変容」が起こるのです。

そして、自己変容を遂げた子どもたちは、そこからさらに彼らのペースで変容を続けます。ここでは、この変容そのものが、学習の過程と重なるからです。私たちの教育は、「学習リテラシー」という概念を持っています。学習リテラシーというのは、自律的な学びの型のようなもので、DeSeCoプロジェクトのキーコンピテンシーと共通するものだと思っています。あるいはそれは、自分自身との向き合い方、未知のモノと自分自身との統合のさせ方と言ってもいいかもしれません。そして、このリテラシーをアウラの森の共同的な世界の中で手に入れられた子どもたちは、自らの未来を自らのペースで切り拓いていけるようになっていくのだと思います。

「キャリア形成」というコトバがあります。不登校の子どもたちが、その後どのように進学し、どのように仕事を見つけ、どのように自律した生活を構築していくのか？ それは、親たちにとっても、教師たちにとっても、あるいは若者支援にかかわる行政のものたちにとっても大きな関心ごとです。しかし、この「キャリア形成」というコトバも、気をつけないとすぐに「就労」というコトバと等価なものとして捉えられてしまいます。確かに就労という過程

は、キャリア形成において大変重要なステップなのですが、このステップも実は個人の物語のある段階にすぎないように思うのです。だから彼らのキャリア形成を見つめるということは、具体的な進路や就労の状況だけでなく、その個人の物語を見つめるということであり、その物語を彼ら彼女らがどのように描いていこうとしているかを読み取ることに他ならないように思います。

ここで紹介するのは、現在24歳になる大手の自動車ディーラーでサービスを担当するヒロシ。彼は、小中学校あわせて2年間しか、学校に通っておらず、長期にわたる不登校の状態を経て中2の時にアウラの森へとやってきます。その後高校で野球部に属し、やがて専門学校を卒業して整備士の国家資格を手に入れ、正社員としてディーラーで働き始めました。ここでは、そんなヒロシへのインタビューを通して、彼自身の物語をそのキャリア形成の過程を通して読み取っていきたいと思います。



1. 小3からの不登校

「ヒロシは、小学校の2年までは別に普

通に学校に行っていた？」

「まあ普通は普通やけど、ちょっと休みがちな子やったんで。それは幼稚園にいる頃からずっと…」

「あ、そうなんや」

「もともと人見知りか子どもの頃から激しくて、あんまり人としゃべるのとか関わり作るのが下手くそ、苦手で。それが一気にきたのが多分3年生ぐらい」

「なんで3年生なん？なんかあったわけ、3年って？」

「いや、特別何かがあったわけでは、ないんやけど、なんかわからんけど…」

「学校へ行くのがいややった？」

「そうなって行って…」

「それって3年のいつ頃なの？」

「それは、もう全然覚えてないけど…1学期の頃は行っていたから、多分2学期くらい」

「それからはもう全く行かへんようになったの？」

「全く」

「親は、行けとかなんとか、そんな話にならなかったの？」

「いや、まあそんな話というか、学校の先生が…」

「毎日迎えに来たわけや？」

「なんで来ないのや、そういういじめがあるのか、とかそういう話はあったけど、別にそういうわけでもないし…。自分でもそんなに学校自体が嫌というわけでもなく、ただその雰囲気か嫌というか…。絶対的に嫌というわけではないけど、なんか…行きづらいな、っていう感じ」

ヒロシは、小3から5年間も学校へ行っ

ていませんでした。小中あわせて2年間しか学校へ行っていない生徒は、私は未だ彼以外に見たことがありません。

「それで、なんかまあ行きづらくなっていう状態で、ずっと家にいたわけなんや。それで家では何やっていたの？小学校のそんな頃って、いったい何やって過ごしていた？」

「寝ているか、ご飯食べているか、あとテレビ見ているか…」

「そんな生活が小学校3年から始まり、中学までずっと？」

「ずっと。一応はでも一回、4年生ぐらいに一瞬学校の方に顔出そうかな、と頑張っていた時もあったけど…」

「まあでも、それは…」

「それも一瞬で終わって…」

「勉強も当然できなかったやろ？」

「できひん」

「勉強は一切やってないの、家で？」

「やってない、やってない」

「ゼロ？」

「ゼロ」

「そしたら家ではとりあえず寝て、食べて、あとはテレビ？」

「テレビ」

「もうそれだけ？」

「それだけ」

「親…、お母さんも途中から何も言わへんようになったわけ？」

「うーん。まあまあ、途中からは。最初の頃は“なんで行かへんの？”とかあったけど、途中からはもう、諦めじゃないけど…言ってもどうしようもないやろな、とかいう感じになって…」

「お父さんは、何も最初から？」
「最初から」
「…そうか。あとお姉ちゃんいたよな？」
「うん」
「お姉ちゃんって、普通に学校は行っていた？」
「お姉ちゃんは、まあまあ普通に…」
「学校行って？」
「お姉ちゃんもちょっと休みがちな人間やったけど、別にそんな同じような感じじゃなくて。ただ単に…体調的などころで休みがちなだけ。人間関係がどうかかっていうわけではなかったし…」
「ヒロシも別に人間関係が、とかじゃなかったんやろ？人間関係も嫌やったん？」
「いや、関係というよりか…上手いことコミュニケーションがとれへんっていう…」
「ああ、コミュニケーションが下手やった？」
「下手やった」
「そうか。それで学校の先生は家庭訪問に来るようになった？」
「うん」
「で、ヒロシは、先生と会ってしゃべってたん？」
「いや、来やはって、まあ会う時もあるけど、嫌で居留守みたいな…」
「まあそんな感じか。小学校3年の時の担任の先生は、最初ヒロシが学校へ行っていた時の様子を知ったはるわけやけど…」
「うん」
「でもそれは学年が変わったりしたら新しい先生になるやん」
「うん」
「で、その先生のことをヒロシは全然知

らんわけや？」
「まあそうです」
「で、それが来やはったりするわけや？」
「また、はい」
「でもそれは会ったり、会わなかったり？」
「それも会ったり会わなかったり」
「うんまあ…会ったらなんで来ないの、っていう話になるから、そればかりもう嫌やし…」
「ああ。もう同じ話になるわけや？おいで、とか」
「その人が嫌とか、そういうのではないけど、そういう…学校の先生と生徒の立場としてのやり取りというか。それ自体が嫌やった。しんどいというか」
「ああ、嫌やったわけや」
「あと…家にずっといると、いること自体が嫌にならなかった、小学校の頃？」
「嫌になる。しんどくてしかたなくなっ…」
「家にいるのがしんどい？」
「しんどい。たまにだから、無性に体動かしたくなってランニングに行ったりとか…」
「小学校の時？」
「小学校の時、小5か小6くらい。あと、その時の友達とキャッチボールとかよく…」
「友達はいたわけや？」
「その時、一人だけ友達でいてくれる子がいて」
「へえ」
「その子とよくキャッチボールとかして、公園で」
「へえー、ということは、家にずっとい

るのは嫌やったんや？嫌やけど学校は行きたくないし…」

「行きたくない」

「ほかに行く場所がない、みたいな状態で悶々としていた、小学校の時？」

「そう。だからおかんが買い物行くって言ったら自分もついて行って、絶対外に出ようと。おばあちゃん家行くって言ったらそれもついて行って」

「でも一人では出れへんかったんや、基本は？」

「まあ行くあてがないから、出ても」

「で、お父さんはずっと黙ったまま？」

「まあ何も」

「…で、そこぐらいから中学になるわけ？」

「小学校も行ったり行かなかったりする時期があったけど…。その時、小学校5年くらいに少年野球もやっていた、一瞬やけど」

「あ、そうなんや」

「うん。頑張ってる途中でたまに友達で少年野球をやるっていう子がいて、それに便乗して自分もちょっと行って見ていい、って自分から言って…、けどそれも結局、夏頃に行くのが嫌になって…」

「それはなんで続かなかったの？」

「まあ一番は、コミュニケーションがとるのが苦手っていうのがあって。休んで、またがんばろうかと思ってまた行くんやけど、やっぱりしんどい」

ヒロシの話の中から、お父さんとお母さんの対話がほとんどない家庭だったことがわかります。特にお父さんは、ヒロシに対してはほとんど口をきくこと、あるいは関

わりさえもなかったようです。でも、無言のまま家族は一緒に食卓を囲み、一緒に生活を送っていたのです。ここにヒロシの育った家庭の独特な事情がありました。両親が決してコトバを交わすことがないけれど、一緒にいるという状況。それはどこかベイトソンのダブルバインドを思い出させる状況であり、両親の仲がいいのか、悪いのか？あるいはそこに関係が成立しているのか、していないのか？ それらがきわめて判断しづらい状況にあったわけです。ヒロシはそんな家庭環境の中で、コミュニケーションに混乱をきたしていったのかもしれませんが。ヒロシは、次第に自分自身が他人とうまくコミュニケーションが取れないということを意識するようになっていったのです。

